

評価委員の皆様からのご講評

○司会 ありがとうございます。それでは、これより評価委員の皆さまからご講評を賜りたいと存じます。

まず初めに、大学全体について林徳治様からご講評を賜りたいと存じます。よろしく願いいたします。

○林 はい、ただいまご紹介いただきました立命館大学の林でございます。本日は非常に長い時間、詳細にわたりまして、評価についてご報告をいただきましてありがとうございます。



特に認証評価のほうで、杉山理事長と後藤学長を中心に、大変ご尽力いただいたのではないかと思います。今回の認証評価の結果にもありますように、ずっとお話を聞いていて非常に素晴らしいと、要するに素晴らしいことばかりだと。特にうちの大学とも比較して、お話をずっと聞かせていただきました。

特に、うちのような大規模の大学に比べて、非常に小規模で学生を非常に大切にケアしているあたり、そういう取り組みが非常によくわかりました。簡単に全体を通してのコメントと、今、ご報告いただいたなかで、いくつか気になった点、「これはもう少しこうしたほうがいいよ」というような点をご紹介させていただきたく思います。

まず総括として、富士学生部長からお話がありました全体の総括です。今の文部科学省が進めています「PDCA」、「Plan」「Do」「Check」「Action」、これは言葉は非常にいいのですが、文部科学省のいろいろな委員から、実際に回っていないと言われております。ところが、今回の報告書のなかにありましたように、回すように一生懸命にやっているというあたりですね。ただの言葉だけではなくて、そのプロセスでいかに回しながら進めていく、これがもう次年度の計画にもありましたね。今までのケースを活用しながら回していく。来年度はまた新しいプランが出てくるというのは、非常におかしいことです。これは科学研究費助成事業などでよくあるのですが、新しい年度になったら、急に新しいプランが出てきて、今までは全然関係なかったと。ところが、岐阜女子大学の場合は、それを一貫して行っているという点

が非常に印象的でした。

特色のなかで、この報告書のなかにある「学修」という「修」がありますね。多くの大学は「学習」、「学」ぶ「習」です。ところが、やはり、ここは「学修」の「修」ということで、大学の授業以外の授業をおこなう前、それと授業をおこなった後の課題の時間。そういう学生の学修時間を含めたという考え方を真っ先に取り入れられているというあたりですね。そのためにどうするのかということで、夏季休暇、春季休暇、そういうものを利用しながらうまくリンクしていく。先ほど、どうやってこれをやっているのかなど、ずっとお話を聞いているなかで、先生方の努力はもう大変だなと。学生を呼んで、指導して、アドバイザーがチェックするというようなことで。とにかく、いくつかのイベント的なものも加えながらやっているというあたりが非常に印象的でした。

それと、もう1点は、認証評価のほうでもありましたように、遠隔教育、サテライト、これも特に久世先生からご報告ありましたように、ICT を使っていく。これは今、非常に大きな問題です。ただ、機材が先行して行って、ちょうど20年前ぐらいでしたか、PCが入ってきたあたりに、先生が使えないとか、そのあたりが、今、タブレットのほうでも出てきているのではないかと思います。そういうことを踏まえながら教育方法の研究をされていたり、教育委員会の連携、そして課題、免許更新と大学院との連携などをやっておられる点です。今日も後藤学長とお話ししていたのですが、主専攻・副専攻という考えですね。これは非常に大事だと思います。

「取り過ぎではないか」、「専門を何をやっているかわからない」。そんなことはありません。大学院では、もうだいぶ前からダブルディグリー (Double Degree) とか、二つの大学の専門を同時に勉強するとか、そのあたりがどんどん進められています。それを目指して海外から留学生が日本に来て、同じ期間に二つの学位を取ってみたりということは、どんどんと進められています。ただ、やはり文部科学省から見ると、飛び級と同じように、もう一つゆっくりとやってほしいという何か慎重な意見もいくつかあるのではないかと思います。

あと、まず今申し上げましたように、岐阜女子大学とはどういうものかと言ったときに、きめ細かいケアがあるということです。それともう1点は、新しい転換を非常に早く取り入れているということです。例えば、アーカイブのクリエイターです。これはもう今後ますます発展されることを期待します。アーカイブが、この岐

阜女子大学を発信して日本中に広がっていったような経緯があります。ですから、今、もう一つ次のステップに来る時期になっているのではないかと思います。そういうあたりで、そのクリエイターのあたりにも少し力を入れていくといいですね。

今回、やはり、ちょっと気になる点がいくつかありました。各学科によって、非常にご尽力いただいたのですが、書き方をもう少し工夫されるといいですね。例えば、「指導目標」と書きながら、これは先生が主体になっているのか、学生が主体になっているのか。例えば、「指導目標で理解させる」という書き方をすれば、これは先生がさせるですよ。ところが、このなかで「何々ができる」というような書き方をしています。これは学生ができるので、「到達目標」になっていると思います。先ほども後藤先生とお話しするなかで、「あまり細かいことを言ったら大変だよ」と。それはおっしゃるとおりです。これはうちの大学も、ここまでできていません。もう学部によっては、白紙の状態で報告書を出してくるところもあります。そのあたりで、もう少し文言についてお考えいただいたら、いいのではないかと思います。

それと、私が気になるのは、新しい取り組みで大学院の単位認定もありました。サテライトで、遠隔によってどこでも勉強していく。今回は沖縄という遠隔を通して実績を挙げられたことは、非常に素晴らしいことだと思います。今後、久世先生が最後におっしゃいましたが、英語というものがあります。英語は、やはり富士学生部長がお話しされたように、グローバル化のなかで非常に重要な位置付けになってくると思います。英語学習については、小学校の先生たちが非常に苦勞しているので、いい考えだと思いました。2種の英語の資格を与えて自信を持たせる、ある意味で、いい方向だと思うのですが、それと同時に、異文化というものをもう少し取り込まれるような取り組みを岐阜女子大学でおこなう。ここには観光ビジネスがあるわけです。この学科なども非常に素晴らしい学問だと思います。同時に異文化コミュニケーションとか、異文化理解というものが、今後、ますますグローバル化のなかで、特にオリンピックを控えて外国からの観光客が多いとか、交流が増えてくると思います。そのなかで異文化理解というものについての実践と体験ができるような場所を提供できるような科目、カリキュラムを少しお考えいただいたら面白いのではないかと思います。

それともう1点は、ポートフォリオがよく出てきました。いくつかのお話のなかで、学修ポートフォリオです。ただ、私が心配していたのは、うちの大学もそうな

のですが、おそらく岐阜女子大学はやっていると思います。学籍番号と学生の成績とか、実態の状況をずっと書かれたエビデンスですね。これをやるのは非常にいいのですが、それを目的を持ってきっちりやっていくことです。それが、なかなかうちの大学もできないです。これは個人情報で、例えば化学でこれだけの点を取った。だけど、その学生が、今後どういうように2年生、3年生になって変化していったのか、変遷していったのかと見るときには、学籍番号がほしいのです。ところが、その学籍番号を成績などのデータのなかに入れることによって、個人が特定できてしまいます。学部のほうで非常に反対があるわけです。しかし、岐阜女子大学の場合は、そういうあたりの各先生のご理解があると思いますので、言葉だけではなくて学修ポートフォリオによって、1年生の学生がどのように変容をしていったのかというあたりを追いかけていくことを、現在のアドバイザー担当に加えて、実際のエビデンスとして提供いただければ、非常にいいのではないかと思います。やはり、学年を越えた科目の設立などを考えていただきたい。先ほど「教養」というのがありました。これは1年生の教養でいいのですが、うちの大学も成功しているのですが、1年生から4年生までの全員参加できて、一つの「教養ゼミ」という言い方をしています。というのは、4回生が学んで、1回生が学んで、1回生が2回生の先輩を見てという考えです。1、2、3、4回生で、学年を問わず、学科を問わず、学生が一つの先生のご専門をテーマとして、授業を提供しています。そうすると、ある意味で、学生が主体的に動きます。また、学年を越えたなかで、いろいろな情報交換ができるということで、これはうちの大学で成功している例です。ぜひ、そういう科目もお考えいただいたら結構かと思います。

最後になりましたが、簡単にずっとお話をしていくなかで、住居学専攻の到達目標など、ここでは住居学専攻だけが「到達目標」という言い方で非常に詳細に書いていただいております。それと、特に今回の資格取得支援制度、必ず皆さん明示していただいております。これは非常に大事です。どのくらい達成したか、このあたりで、特に気に入ったのが、平成26年度に引き継いで、コア・カリキュラムを入学前・初年次・専門教育・資格取得・長期休暇などを一貫したPDCAサイクルを回し、持続していくということを、住居学専攻のほうでちゃんと明記しているあたり、非常に素晴らしいことだと思います。先ほど、ポートフォリオのお話をしましたが、これは消費者の検定試験、基礎コースの結果、これは3年生ですね。このあたりなどが、

個の変容を追いかけていくのに非常に面白いのではないかと考えました。それと休業中での取り組みとして、「ECO+もの作りプロジェクト」などが、なぜ休業中に、どのように先生がやっていたのかというのが、非常によくわかりました。

それと1点、あと初等教育学専攻のほうは、非常にほかの学科に比べて書き方が異なっていました。カリキュラムポリシーを中心にずっと書かれておりました。特に、プログラムの成果の状況が、これは全部ポートフォリオになると思いますので、このあたりなども、今後、継続されたら非常にいいかと思えます。特に文化創造学専攻のほうは、これからも関心があります。文部科学省が出している環境を変えるというあたり、それと主体性、そういった質の問題です。これもまさに文化創造学が抱えている問題、アクティブラーニングとか、主と副という二つの領域の学問を勉強していくというあたりは、非常に大賛成です。これは、うちの大学はまだおこなっておりません。ですから、このようなあたりでは、今後、岐阜女子大学がますます発展されますように、心から祈念いたします。今日は、本当に長い時間ありがとうございました。

○司会 ありがとうございました。続きまして、全体へのご講評として、もうお一方、宮里様からいただきたいと存じます。よろしくお願いいたします。

○宮里 隣の林先生が、本当に丁寧に素晴らしい発言をされて、ちょっと私もどうしたものかと思いました。本当にきめ細かい対応がされていることに、実はびっくりいたしました。



例えば、久世先生がおっしゃったタブレットを使った教育が、今後、おそらく全国的に浸透していくでしょう。それに対して教員がタブレットを使い切れるのか、そして、その教材をつくれるのか。ただ、インターネットラーニングとして業者が作っているものを、そのまま学校が取り入れるというのか。そういうことではない。いろいろな教材づくりを通して、自分自身が学んでいくという機会が、今後ますます発展していくことができれば、いろいろな資格試験にも通じていくのだろうと思いました。

でも、本当に林先生があまりにもご丁寧に話されましたので、本当に恐縮でした

が。次にくる私が、ちょっと言いづらくなつたという部分があります。でも、本当にきめ細かい対応をされているということに感動いたしました。また、今後、ご協力できるところがありましたら、させていただきたいと思いました。ありがとうございました。

○司会 ありがとうございます。評価委員の福富様のご都合により途中で退席をされますので、ここで健康栄養学科のご講評を賜りたいと存じます。福富様、よろしくお願いたします。

○福富 岸上先生、ありがとうございました。

学生が入学したときのグレードアップテストの結果を見ますと、確かに90点を取る子もいますが、50点以下が3分の1ぐらいいる状況です。その子たちを国家試験の合格率100%に導くのは大変なご努力だったと思います。その導きのなかで、



まずやる気を大事にするということが一番のキーポイントではないかと思えます。そこをアゴラクラスで専門性の興味を引き出しながら、100%まで導かれているのは本当に素晴らしいことではないかと思っておりました。

今年、私どもに二人ばかり就職を希望している人が来ました。話を聞いてみますと、栄養だけではなくて、いろいろな取り組みをしたいという夢を持っている学生さんたちでした。本当に国家試験だけのための勉強ではなくて、将来を見据えた教育がおこなわれていると思えました。とても素晴らしい教育内容だと思っております。今後もぜひ続けていただきたいと思います。以上です。

○司会 福富様、ありがとうございました。ここで福富様はご退席をされます。ありがとうございました。

続きまして、住居学専攻のご講評を、白井様から頂戴したいと存じます。よろしくお願いたします。

○白井 清水建設の白井でございます。まず、詳しい黄色い表紙の冊子をいただきまして、本当にありがとうございます。



貴重な資料をありがとうございました。森先生のご丁寧な説明をいただき、ありがとうございました。

この黄色い冊子を事前にいただいておりますので、わが社の人事部と設計部、建築技術といった専門部署に回して、意見をもらって、それを集約いたしましたので、それを申し述べさせていただきます。

まず御校の教育方針であります「教養ある専門性をもつ職業人養成を重視した教育を施す」に基づきまして、住居学専攻におかれましては、座学だけではなくて、理論を実習で確認する学びとして、キャンパス内のトイレや食堂のリフォーム、また保育実習室の建設など、特別プロジェクト実習という実践授業が展開されておりました。学生さんを体験で育てて、また就職に直結するという実践力の獲得に非常に効果が上がるのではないかという意見でした。このようなリフォームや建設の実習に取り組まれることによりまして、設計、インテリアデザイン、また建設ということをも身を持って体験することになりますので、私ども企業側としては、即戦力として期待できるのではないかと考えております。

あと、御校で育成する人物像として、住む人の「満足する住環境を創造できる」スペシャリストを掲げられております。そして、在学中のインテリアコーディネーターの資格取得と、卒業時に二級建築士の合格レベルの知識になるようにという明確な目標を示していただいております。

コア・カリキュラム等を拝見しますと、非常に充実しているように感じましたが、特に印象を受けましたのが、入学前の補完学修課題としての数学の基礎講座でございます。これにつきましては、プレースメントテストというクラス分けが実施されておりますが、今までの先生方からもお話が出ましたが、そもそも非常に少人数教育ですが、さらなる進度別と言いますか、習熟度別と言いますか、きめ細やかな指導がなされているということがよくわかります。また、それぞれの学生さん、個々の数学力に応じましたリメディアル教育もおこなわれております。技術系の人間に言わせますと、名古屋大学や名古屋工業大学など、他の大学では見られないような非常に特色のある御校独自のものであって、非常にいいと。数学の苦手な学生さんの基礎力を定着させるうえでも、非常に大切なことだと思います。もっとホームページ等でアピールされたらいかがでしょうかという意見でした。あと、数学以外の科目につきましても、二級建築士の試験科目であります5科目全体にわたりまして、

コア・カリキュラムとして構成していただいております、十分なものではないかと考えております。建築関連法規、知識の習得を充実されております、練習問題や小テストによる理解度の向上を図られております。予習や復習といった自宅での学修時間を確保されて、知識の定着につながりますので、非常によいと思っております。

あと、カリキュラムとそれを構成する科目というところで、コミュニケーション能力の全体を統括するというご説明があったかと思えます。コミュニケーション能力の集中講座がございます。これは会社で言いますと、設計業務のなかでは、まずユーザーさんのニーズを理解する必要がございます。建物に対して素人の方もいらっしゃると思います。そういう方は建築の知識ゼロなものですから、そういうゼロの方のお話から、相手のニーズを引き出すには、非常に高いコミュニケーション能力が必要です。また、建設業務におきましては、建設物は一人では絶対できないものです。数多くのユーザーさん、専門工事の業者さん、その現場で働く職人さんといった多くの方々と協業で作り上げていくのが建設物です。これについては相手を理解して、相手に自分の意思を伝えるというコミュニケーション能力が欠かせないものです。二級建築士の合格レベルの知識だけでなく、設計や建築業務に携わるのに、非常に必要なコミュニケーション能力を向上させるという大目標を掲げられていて、非常に有益な講座だと考えております。

もう一つ資格のことでお話しさせていただきますと、年間の履修計画表で、「宅建講座（有料で希望者のみ）」というところで、日程も書かれておりましたが、これについては有料ということですので、おそらく専門学校と提携されて集中講座を開催されると思います。御校の学生に、今後、深く関わりのある「建築基準法」、または「都市計画法」の学習には、もちろん直接有益です。ところが、宅建で大きなウエイトを占めるのが「民法」という科目です。これは社会人として生きているうえで、非常に知っておくべき知識です。私は実は商学部出身で専門外なものですから、大学では民法は履修せずに卒業してしまったのですが、社会人になってから勉強しておくべきだったと深く後悔して、会社に入ってから勉強しました。その意味でも、学生さんのうちに、このような宅建講座で「民法」を勉強するというのは、非常に有益なことだと私自身感じておりますので、学生の皆さんに、宅建講座は有料ですが、ぜひ受講するように引き続きお勧めいただければと思っております。以上が、

御校の住居学専攻に関する私どもの感想です。

あと、1年次から2年次で、木の構造についてしっかり学ぶカリキュラムがあると書かれておりました。例えば、1年次、2年次の夏季休業中などの長い期間を利用して、実は当社の木工事専門の施設である東京木工場が木場にごさいます。これは明治17年にできています。明治17年というと、もう130年近くたっている施設ですが、もちろん、リニューアルされております。そういった専門の施設もごさいますので、もしよろしければ、そういったところも見学していただければよろしいのかなと思います。

先日、東京の工場の担当に、私が直接電話で聞きましたら、年間100組ほどが見学におみえになっているそうなので、ぜひお時間が合えば来ていただければと思います。また、木工場だけではなくて、その隣接地域の江東区越中島に技術研究所があります。これも新築になったばかりで、これは工場が100組とっていましたが、その倍以上の方が年間来られるような施設でごさいます。東京駅からも近い施設です。希望する方だけでも、ぜひご覧になればよろしいのかなと考えました。

私からは以上でごさいます。どうもありがとうございました。

○司会 ありがとうございます。続きまして、生活科学専攻のご講評を藤木様から賜りたいと存じます。よろしく願いいたします。

○藤木 では、生活科学につきまして、丁寧に説明をいただきました。また、日頃から岐阜女子大学は一人一人の生徒を大事にくださっている大学だなということを感じております。



生活科学は、家庭科という分野になるわけですが、衣・食・住、今ですと保育や介護、消費者生活に必要な部分の本当に盛りだくさんな領域を必要とするなかで、本校には、岐阜女子大学の卒業の教員が本務で4名、常勤講師で2名。全部で13名います。岐阜大学を出た人が4人いるわけですが、それ以上に岐阜女子大学の先生方が本校の生活文化科を支えてくださっております。これは昨年もお話ししましたように、岐阜県内の家庭科の教員の占める率も、資料のなかには「25%」と書いてありましたが、本当に二人採用しかないときでも、必ず一人が岐阜女子大学

の、現役ではなく講師を経験された方々が教員になっておられます。そういった伝統を持っておられる岐阜女子大学と、私は思っております。

育成する人物像のなかの特に家庭科に関する高い専門性はもちろんですが、ここにあらためて縫う技術という分野を挙げておられるということ。昨年度からスタートしておられます中高校生を対象としました伝統文化裁縫コンテストにつきましても、衣・食・住のなかで、保育も含めたなかで、今の若い世代が苦手としている分野です。今は面倒なことはやりません。ちょっとお金を出せば買えるわけです。しかし、それでは先々の日本がどうなっていくのかといったことを、理事長さんも含め考えていただいている大学かなということを思っています。領域の広いなかで、何と云うのでしょうか、やっぱり今、一番心に触れるところを、生き抜く力を育てるなかで大事なことはと、あらためて思うと、といったところになるかと思えます。昨年度もお話があって、今日も林先生からお話がありました。「ECO+もの作りプロジェクト」がスタートしていること。それから、「お母さんの手づくりを応援します」、幼稚園で使うようなものの手づくりをと。そのようなことも発信してもらえということが、とてもこれはありがたいことです。こういったところに気付いていかないと、本当に人そのもの。これには女性だけではないと思っていますが、手づくり感、この実習を通して学んでおられるということが根底にあると思えます。これが今、文部科学省も「アクティブラーニング」であるとか、「地域創生」だとかいった言葉が出てきていますが、これを率先してやっつけていただいているかなと思えます。

そのなかで、ちょっと気になりますのが、岐阜女子大学を卒業された先生方の特徴は、とても真面目な人柄の方々です。ただ、そこで柔軟性と言いますか、本当にまっしぐらな部分がちょっとあるかなというところを思います。また、自信をもう少し持っていただけるといいなど。これは学生時代から、何と云うのでしょうか、幅広い教養、プラス、もっと本物に触れたり見たり、現場に足を運ぶといったようなことが、ちょっと計画のなかにあってもいいのかなということを感じています。せつかくですので、今年の教員採用試験が、二次でお二人の方が残念だったということを知ると、本当に惜しいなということを思います。何が足りなかったのか、そのへんをきちんと検証していただいて。たぶん、被服・食物の実習がありますので、そのあたりではないかと。これは二次前、直前では、たぶん無理だろうと思えます。やはり1年次からコツコツと、そういったものが好きになって、自分の生活にきち

んと身につけていただけるとありがたいなということを思っています。自分自身も偉そうなことは言えませんが、ちょっとした自信を持つことが、きっと次なるステップになるだろうと思います。

今回、とても感心しましたのは、1年生、2年生、3年生、4年生と順に力を上げていくものと、当然、誰もが思っているなかで、2年生に成績が落ちる傾向があるという調査をされた。そして、しっかり勉強させるとおっしゃった。ただ、しっかり勉強をどのようにさせるのかなと、ちょっと疑問に思いました。今の4年生に比べて、3年生は力不足だと。これは本校でも、よくそういうことを、つい言ってしまいます。「この学年は」と。その学年カラーにしてしまいます。そうしてしまうと、生徒をそこから伸ばせない現実もあります。結局、教師自らが決め付けてしまう。でも、生徒個々は必ず可能性があるのではないかなと、私はいつも思っていますので。その子たちを、どのように力を。それには、きっと時間がかかるかなと思います。今までも十分に手間をかけてくださっている大学です。でも、不足しているものをきちんと見極めていただいて。今、評価の可視化で、今回、本当に昨年度と比べて、とてもよくわかりました。具体的に、生徒に欠けている力を調査していただいて、分析していただいて、それに力を注いでいただけると、もっとよりよくなるのかなということを思いました。私自身も消費者力検定がどんなものなのか、さっそく帰ったら調べなければいけないなということで、勉強させてもらいました。

あと、これだけ大学全般で、岐阜にあって広くやったださっているのはありがたいなということは思っています。ただ、これが岐阜県で岐阜において、どれだけの方が理解しておられるかなといったところが、もっと地元でピアールをしていただけるといいなと思いました。

最初に、杉山理事長が2018年問題のお話をされました。もちろん大学もそうですが、われわれ高校側も本当に、県立高校にあっては、私学の台頭がずいぶんありますので、厳しいポジションに置かれている高校としましては、先々週も教育長との面談のなかで、いろいろと叱咤激励をされています。ただ、大事にしなければいけないもの、今の現実。新しいものばかりを取り入れればいいのかというところでもないかなというところがありますので、岐阜女子大学ならではの良さを残しつつ、今の時代に合ったものを発信していただけるとありがたいなと思います。学び続ける教員のためにもサポートしていただける大学ということをお聞きして、またさらに意

を強くしましたので、どうぞ今後ともよろしく願いいたします。

順にまとめてお話ができなくて申し訳ありませんが、そのように感じました。よろしく願いします。

○司会 ありがとうございます。続きまして、初等教育学専攻につきまして、小関様よりご講評を賜りたいと存じます。よろしく願いいたします。

○小関 お願いします。静岡県の小関と申します。昨年に引き続きまして、あらためて思いましたが、ほかの委員の方々もおっしゃいましたが、本当にきめ細かな教育をされているということを実感いたしました。



入り口のところに、さまざまなテキスト、入学前の学修課題テキスト、初年次補完テキスト、あるいは資格取得ガイドブック。これはできたてのものかなと思いますが、これを見させていただいて、本当にきめ細かな教育をやっていただいて。綴じてありますので分厚いものになりますが。自信をもって高校から送り出される、大学に入ってから、本当に力を付けていただけるということを実感いたしました。

あとは、本当にフットワークが軽くて、PDCAを回していただいて、課題については、すぐに対応していただく。年度、年度の改善が目に見えて感じられる報告でした。いくつかの資料等を事前に送っていただきましたので、それについて気付いたこととお話しさせていただきたいと思います。

まず黄色の評価資料です。初等教育専攻のなかには、子ども発達専修と学校教育専修の二つの専修があります。先ほど、学部長、学科専攻部長の方からは、学科の専攻の目的としまして、「乳幼児期から学童期への人間の基礎づくり」といったお話をされました。まさに、これは少子化のなかで、人がますます減ってくるなかで求められる、本当に、これから力を入れていかなければいけない分野かなと感じております。同じ専攻のなかに二つの専修がございますので、専修それぞれの教育もあるかと思いますが、0歳児から12歳児までという話もありました。その12年間を見通した教育をしていただければいいかなと思います。初等教育の資料の一番最後のところに、マトリクス、コア・カリキュラムの評価・改善という資料がござい

ます。これについては、先ほど林先生が触れられましたが、コア・カリキュラムの評価・改善のところで、PDCAの表がございます。こういった計画のもと、実施・実行をして、その結果、どういった点が達成できた、達成できなかった。あるいは、どの程度、達成できたのか。それを受けてどう改善していくという度合いですので、その達成の評価。次のところが、「何々できる」という表現がいくつかありますので、このような目的のもと、こういう実施をして、どうであったか。ここは結果や評価、達成度等を表す表現のほうに繋がっていくのかなと感じましたので、これは次年度以降、見直しをしていただければと思います。

あとは、今日いただきました報告資料のなかで、「プログラム2」の取り組み状況のなかで、1年生から3年生まで達成度を自己評価された結果が載っておりました。このなかで、3年のところで低い評価としまして、「教科教育法での学習定着」が低かったというお話がありました。これは考え方によっては、3年になりますと、その前の前のページのところで、実習の計画がございましたが、1年、2年で、それぞれ短期の研修を積んで、3年になりますと1カ月の長期の教育実習があらうかと思えます。1年、2年で、十分に研修と学習と実践の往還ということ踏まえて、スパイラルで実践をしてきているわけですが、長期の研修になって初めて壁にぶつかった、自分のこれまでやってきたことが通用しなかった場面があって、その壁にぶつかって謙遜の意味を込めて、こういう低い評価が出ているのかなと思えました。これについては、ここで自信を失いかけても、その表の下から2行目のところに、「就きたい職への明確な目的（育てたい子ども像）」の評価については80%と高い評価ですので、実際に教育実習をやってみて、あらためて教員に対する思いが強くなったとも解釈できますので、ここで自信を失った場合であっても、そこで自信をもたせるとか、あるいは1年次、2年次の学習を見直しの確認していただければいいのかなと思えます。1年次に自覚を持たせて、そもそも専攻や専修を選ぶ段階で、自分は将来、保育士になるんだ、幼稚園の教員になるんだ、小学校の教員になるんだという高い志を持って入ってきた生徒たちですから、その自覚をいっそう強めるとともに、その裏付けとなる教科指導力については、計画的に付けていただければよろしいのかなと思えます。

あと、これは初等教育に限らず、中等教育も大学教育もそうでしょうけれども、国の教育に関わる動きは非常に活発になりまして、教育再生実行会議、また中央教

育審議会のところでさまざまな動きが出ております。初等・中等教育に限って話しましても、昨年 11 月には学習指導要領の諮問がございました。12 月には中教審の答申がありました。このなかで小中一貫教育の制度化の話も出ました。あるいは今週の初めの 2 月 4 日には、小学校、中学校で新設される特別教科「道徳」の学習指導要領の改訂がなされました。このような国の動きも念頭に置きながら、さらに発展させていただいていきます岐阜女子大学の教育について、さまざまな観点について反映させていただければと思います。

これからの教員に求められる力としましては、小学校についても専門教科があるわけですが、特に小学校については、全ての教科を教える場合がございますので、教科横断的な視野・知見。専門教科をもちろん踏まえてのことですが、教科横断的な視野、あるいは小中一貫、中高一貫に加えまして、幼・保・小の連携という接続ということも大事な観点かと思えます。学校段階間の接続、あるいは円滑な移行といったことも視野に入れていただければと思います。あとは、アクティブラーニング、あるいは iPad の活用等を既に導入されていますので、学習指導要領でいわれております学力の 3 要素の対応については既にできているのかなと思えます。

昨年度もお話をさせていただきましたが、新たな課題への対応としまして、発達障害等、特別な支援を必要とする生徒への対応、あるいはキャリア教育、ICT の活用、新たに加わります道徳の理論や実践の指導法。先ほど林先生からもありましたが、英語教育、外国語教育につきましても、小学校にも入ってまいりますので、小学校への指導法。あるいは中学校・高校につきましても、高度化が求められておりますので、そのさまざまな視点について、国の動きを先読みしながら、今後の教育課程にも反映させていただければありがたいと思えます。

毎年、話をしておりますが、本当にきめ細かな教育をしていただきまして、高校側からも、本県からもたくさんの中学生在が来ているわけですが、自信を持ってお送りできる学校でありますし、ここで 4 年間ないしは 5 年間教育していただいて、ぜひ本県の教員に一人でも多く受かっていただければうれしいなと思えます。今後とも、よろしくお願いいたします。

○司会 ありがとうございます。それでは、文化創造学専攻につきまして、早川様よりご講評を賜りたいと存じます。

○早川 ありがとうございます。本題に入る前に、後藤先生を中心につくられた木田宏さ

んの本の件ですが、私も中央教育審議会で教育委員会制度の改革のど真ん中の話し合いをしていたときに、おそらく教育委員会制度はなくなるだろうなと思っておりましたが、あの本が出てまいりまして、ちょっと風向きが変わりました。教育委員会制度が残ったということに対して、非常に大きな力になりました。その点を申し上げたいと思います。



今の職に就く前、20年ほど前に、県の教員採用担当をやっておりました。小・中学校で採用数が74、86という年もありました。20倍ぐらいの倍率でした。25倍、もう少しあったかもしれません。今は350から400ぐらい、大量退職時代で、ずっと採用しています。しかし、少し前までは教員の人口ピラミッドがワイングラス形だといって、一番細いところが20代、30代になっていると言われました。それから、時間が経って、われわれは3部グラス形と言っています。40代ぐらいが砂時計みたいなかたちで、一番細いところになっています。ということは、あと10年、15年すれば、その細いところが上に来てしまうということです。あっという間に世代が動いてしまったと、私自身も驚いています。そうすると、あと15年もすれば、教員採用試験も冬の時代が来ってしまうということです。しかも25年すると、岐阜県の小・中学校の児童生徒数は半減すると言われていています。25年というのは、平成に入ってから、その時間を後に延ばせば半減になるという将来予測が出ています。そうしたなかで国は教員の養成について、教職大学院の制度改革を中心にやっていますが、それが問題解決になるかどうかは別問題として、そこを一生懸命にやっています。では、私学や開放制の免許の在り方については論議されているかという、何も論議されていなくて、非常に心配なところです。いずれにしても養成と採用と研修という一体化の方向は間違いないわけです。養成は大学で、採用は県教育委員会で、という話にはなっていないだろうというときに、先ほどの論に出ていましたが、免許の更新を単位化していただくというのは大変ありがたい話です。理論と実践の往還とは、まさに現職の教員に必要なことであって、大学院や免許更新についての学びは非常に効果が高いということは実感しておりますので、そうしたことの制度化は現場の期待も非常に高いところです。

文化創造学部のお話を伺って、この大学はどのような強みをアピールしていくのかということは、これから10年、15年先のことを考えると、今こそ築き上げていかなければいけない大事な使命だと思います。文化創造学部のご発表のなかに、ICTに強い小学校教育がありました。これは、まさにわれわれも膝を叩いて喜んでいることです。先ほどから出ていますが、タブレットを使いこなせる人材が不足しているのは間違いないわけです。電子黒板やデジタル教科書は、私ども全ての学級に入っております。これはベテランの先生が使い勝手がいいわけです。新しい機材というものの授業の構造を根本的に変えるものではありません。ただ、タブレットになると、そうはいかないだろうという感じもあります。しかもタブレットは上位の子に影響があるのか、中位の子なのか、下位の子なのか、いろいろな研究が出ておまして、まだ安定していません。しかも使い切れていない。それが反転授業になるのか、今までの授業どおりなのかははっきりしていないわけです。何も検証されないなかで、「タブレット、タブレット」と言っているような状況です。間違いなくタブレットを入れなければいけないので、われわれも導入しております。今後、特に英語検定について、まだこれは発表しておりませんが、Appleと協力して研究を始めようと思っています。ぜひ、この学校の教員や講師になる人がタブレットを使いこなせるという評判は、うんと高めていただきたいと思います。期待しております。

それから、二つ目に「イノベーション人材」のことが出ておりました。私もそれは非常に重要だと思います。端的に言って、イノベーション人材とは、私どもが学校現場にいると、やはりアイデアのある先生、ポジティブである先生です。何かを頼んだりするときに、ネガティブな反応をされるのが一番困ります。ですから、うんと前向きになって、それは校長でもそうですが、何か新しいことをやろうというのに、「いや、そんなことはできない、忙しいから……」という校長に限って何もやっていない校長であるわけです。だから、何かやるときに、「ああ、もう、うちはやっていますよ、それは導入するのは簡単ですよ」と対応できるような人でないと、これから新しい制度がどんどん出てくるときに、その制度に合わせていったら、学校は疲弊するに決まっています。その制度を自分のものにできるようなアイデアと、ネガティブオーラを出されてもポジティブに問題解決ができる人がイノベーション人材だろうと思います。特に、20代は素直で吸収力のある教員が一番です。

もう一つは、これからはいろいろな場面でのプレゼンテーションの力が必要になってきます。大学入試についても、大学入試改革というのは、まさにプレゼンテーションの力を試されるということになるわけです。おそらく教員採用試験の二次試験がうまくいかないのは、実技の問題ではなくて、プレゼンテーション力の問題です。実技の配点が少ないのが、二次試験です。プレゼンテーションの能力です。そこは大きいと思いますので、その力を育ててください。

それから、三点目で、岐阜市も新聞等で発表したわけですが、小学校1～2年生で、全国に先駆けて英語の教科化をするのですが、われわれは英語活動をやっていたので、教科化といっても、そんなに大して変わらないだろうと思っていたのですが、全国的に反響が非常に大きくてびっくりしています。それに対しての対応をいち早く考えて、岐阜市のためではないでしょうけれども、いち早く考えていただければ大変助かりますので、それもまた強みとしてアピールできる部分だと思います。

もう一つは、学生を学校現場でボランティアに出していただくというのは、単位になっているのですか。それはなっていないのですか。

○森 ボランティアは、今は単位にしてないです。

○早川 してないんですね。

○森 はい。

○早川 それをぜひ単位にしていただけると、われわれはお願いしやすいです。というのは、例えば、放課後児童教室は、今大変大きなボリュームで、ここは子育てが充実しているかどうかというのは、子育て立市としてどうなのかと判断されるぐらいのところですが、今は非常にそこが手薄で、保育の状態というか、悪意を持って言うならば、プロイラー状態の子どもを預かっているという状態です。発達障害の子にも指導員がつきっきりで、他の子は放ってあるという状態です。もう少しお金を掛ければいいことができると思うのですが、そこに多くの人材を投与したいということとか、低学力のサポートとか。

もう一つ私が考えたのが、夏休みにプールがありますが、今小学校のプールの開放時間は本当に短いです。リクエストとして、プールを開放してほしいというのがあるので、あれもアウトソーシングして、誰かにボランティアでやってもらったらどうかと。学校の先生が忙しいなかで助けていただけるチャンスがあるので、できるだけ、そうしたことを単位化していただくようなことをしていただけると、大変

ありがたいということです。

最後にですが、ここは教員養成学部ではなくて、いろいろな学部のなかで教員養成がなされているということです。いろいろな道から教員の道をアクセスできるということが、この大学の大きな特色であるし、強みだと思います。教員以外の道もあるし、それがお互いに響きあって、自然にリベラルアーツみたいなことを学べる可能性もあるわけです。教員養成学部として教員を養成するのではなくて、いろいろな学部から教員養成へアクセスできるという教員養成がなされる学校の特色というものを、強みとしてはっきりされると、私はいいと思います。

それから、この文化創造学部で図書館司書のことがあります。ご存じのように岐阜市は、これから大きな図書館をつくります。一時期、図書館司書の採用を止めていました。その理由はあまり積極的には言えないですが、その仕事でしか退職までいきませんので、その人がちょっと力量的に、という場合に、ほかの部署転換ができなかったので、一般の行政職でできる人を図書館に配置していました。しかし、あれだけ立派なものができるわけですから、計画的に採用していこうと方向転換をしますので、ぜひ優秀な人材を送っていただきまして、中央図書館で活躍していただければと思いますので、よろしく願います。以上でございます。

○司会 ありがとうございます。それでは、最後になりましたが、学生部長の富士よりご挨拶をさせていただきます。

○富士 評価委員の先生方に、一言お礼を申し上げます。

本日は、長時間にわたり「岐阜女子大学教育課程外部評価委員会」に、ご臨席を賜りましてありがとうございました。

また、ただいま、熱心なご講評をいただきました。このご意見につきましては、私どもにとりましては大変貴重なものです。また来年の新しい活動の糧になるものでございます。本日いただきましたご意見を真摯に受け止めて、来年の活動に、ぜひ活かして参りたいと思っております。

それと、今日はせつかくの土曜日ということで、いろいろ先生方におかれましてはご予定などおありではなかったかと思っております。わざわざ私どもの外部評価委員会のために時間をさいていただきまして、本当にありがとうございました。時間も予定より少し延びてしまいました。大変申し訳ありませんでした。今日いただきましたご意見を必ず来年の活動に活かして、よりよい岐阜女子大学を築いていきたいと

思っております。

それでは、これもちまして、「岐阜女子大学教育課程外部評価委員会」を終了とさせていただきます。本日は、本当にありがとうございました。

○司会 これを持ちまして「平成 26 年度岐阜女子大学教育課程外部評価委員会」を終了させていただきます。ありがとうございました。

(終了)